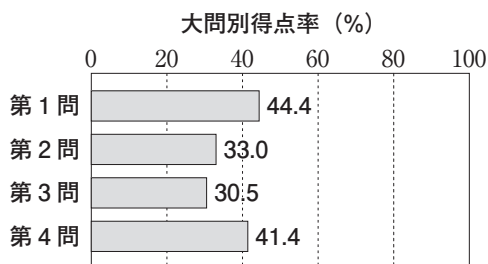
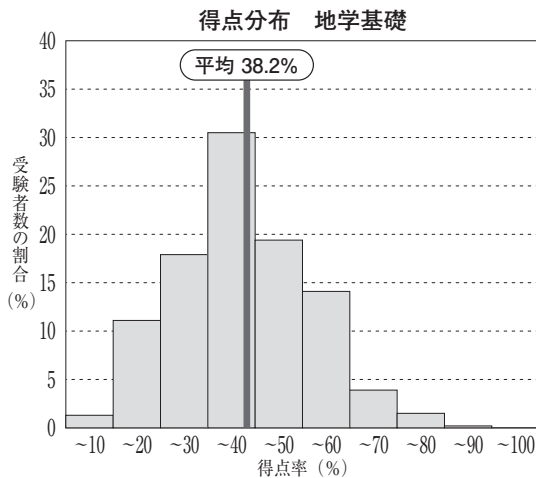


地学基礎

論理の展開を把握しよう。

I. 全体講評

今回の得点分布は、次のようになっている。平均点は19.1点であった。一通りの学習を終えている受験者も多かったと思われるが、十分に演習を積み、知識を定着できている受験者はまだ少なかったようである。「地学基礎」は「地学」に比べて学習項目が少なく、教科書をしっかりと理解することで十分に満点を狙える科目である。一つ一つの知識を確実に身につけて、着実に得点を伸ばしていくようにしましょう。



II. 大問別分析

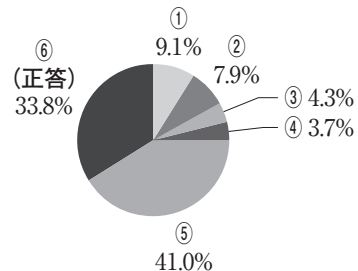
第1問 地球とその活動

地球規模の流れをつかもう。

Aではプレートの運動と地震、ホットスポットとの関係についての基礎的理解を確認した。問題図1の世界の地震の震央分布は、プレート境界をよく表している。それぞれのプレート境界の種類と地震の特徴について整理しておこう。

Bでは先カンブリア時代の生物の進化と全球凍結についての理解を確認した。解説の年表を参照し、先カンブリア時代の地球環境の変遷と生物の進化の過程を把握しておこう。

問2 [2] 各選択肢の選択率



※注) 無回答・マークミスは割愛したため、
選択率の合計は100%にならないことがある。
以下同様。

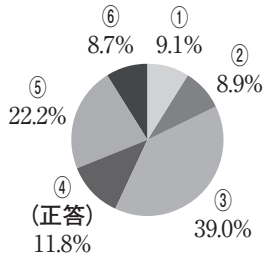
第2問 大気圏と海洋

仕組みを理解して覚えよう。

Aでは大気圏の層構造について基礎的知識と理解を確認した。問題図1の大気圏の高度による気温変化のグラフは重要である。それぞれの層の高度や特徴について整理しておこう。

Bでは海洋の層構造および海洋と気象の関係についての理解を確認した。大気と海洋の相互作用について、その仕組みを理解しておこう。なお、大気と海洋の構造については、2015年の初回のセンター試験「地学基礎」でも出題されている。

問1 ⑥ 各選択肢の選択率

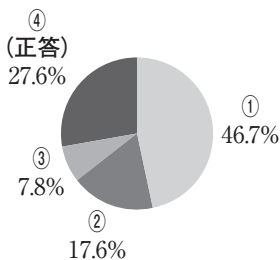


第3問 銀河と宇宙

銀河に関する知識を整理しよう。

銀河系と銀河および宇宙の大規模構造についての総合的理解を確認した。教科書や資料集の写真を活用し、いろいろな銀河や大切な用語を整理しておこう。なお、銀河の分布に関する問題は2016年のセンター試験「地学基礎」でも出題されている。

問1 ⑪ 各選択肢の選択率



第4問 ハビタブルゾーン

教科書の知識だけでなく広く関心を持とう。

天体に液体の水が存在できる条件についての総合的理解を確認した。近年、地球外生命の発見を期待して、太陽系外惑星についてのニュースが世界的に話題になっている。このような事にも関心を持っておこう。

Ⅲ. 学習アドバイス

◆センター試験の地学基礎について。

センター試験の「地学基礎」は新しい科目のため過去問が少なく、学習を進めるにあたって不安もあるだろう。しかし、センター試験の出題範囲は教科書に限られている。センター試験で高得点を得るためには、「教科書」→「問題演習」→「教科書」と

いう流れの学習方法を反復し、教科書を徹底理解することが大切である。

◆これからの学習について。

学習にあたって最も大事なことは、地学基礎は暗記科目ではないということである。

「地学基礎」の学習ではまず教科書を通読しよう。教科書を通読したら、今度はできるだけ丁寧に教科書を読んでいこう。大事なことは、各分野それぞれの論理の展開を把握することである。どのような観測や観察、実験がされ、そこからどのような考察がされているのかを理解しよう。そのために、図・表・グラフを正確に読む力をつけていこう。図やグラフを正確に読むためには、それを自分でノートに描いてみるのが大切である。描くことで、見るだけではわからなかったポイントが見えてくるはずだ。また、教科書を読むときは用語を暗記しようとするのではなく、その用語がどのように使われているのか、その論理の道筋を理解するようにしよう。

◆模試を活用しよう。

「地学基礎」にはセンター試験の過去問が3年分しかなく、演習量が不足しがちである。そのため、模試を演習の一環として学習を進めていくことが重要となる。2か月ごとに実施される東進のセンター試験本番レベル模試は、全国統一高校生テストも含め年6回で「地学基礎」の出題範囲をすべてカバーするため、学習の進み方と学習の不足点を判定できるともよい機会である。今後も模試の受験を継続し、着実に得点を伸ばしていこう。